

日本人と桜の深い関係

日本においてはサクラは、関心の対象として特別な地位を占める花である。

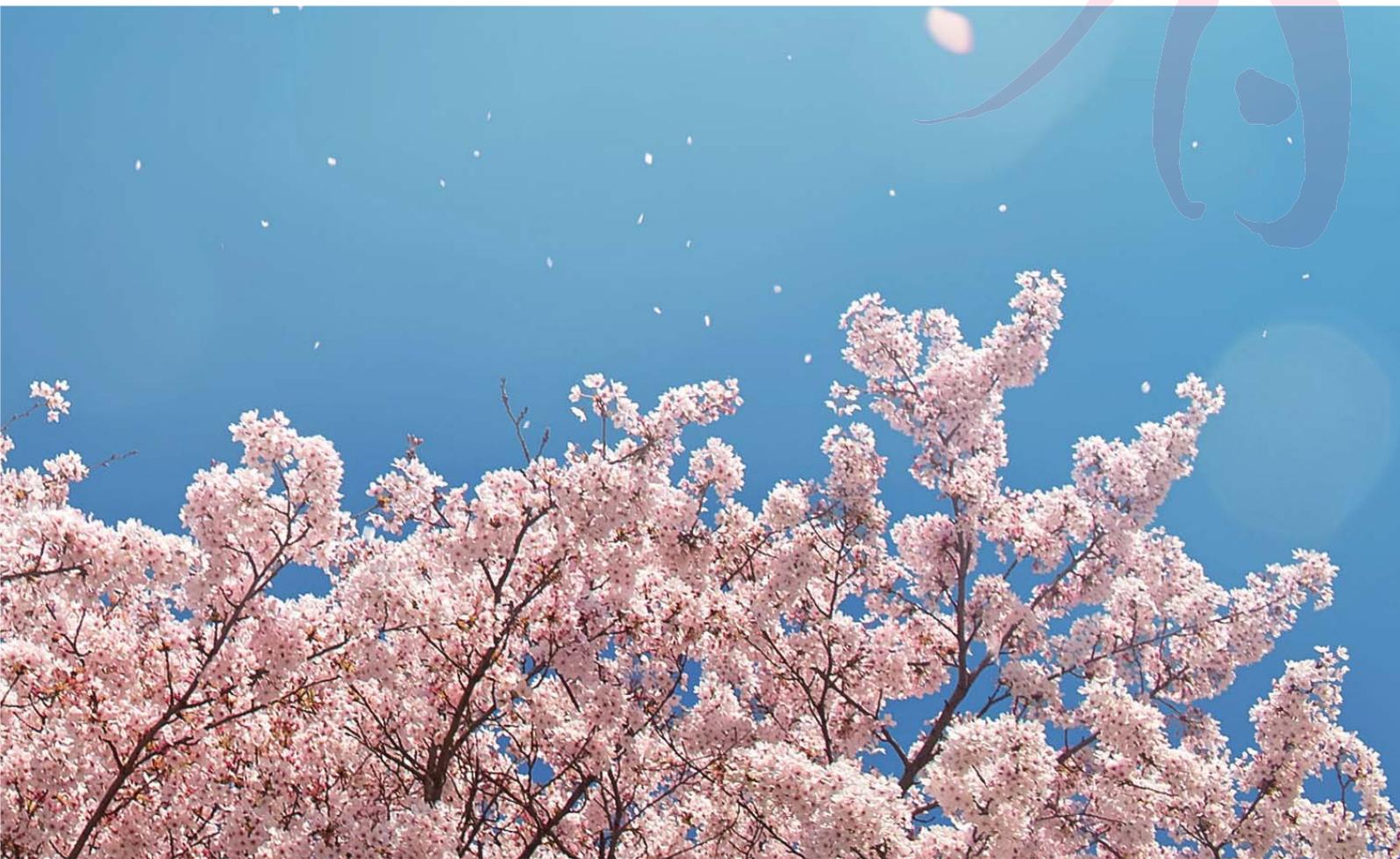
桜では開花のみならず、散って行く儚さや潔さも、愛玩の対象となっている。

古くから桜は、諸行無常といった感覚にたとえられており、ぱつと咲き、さつと散る姿ははかない人生を投影する対象となった。

江戸時代の国学者、本居宣長は「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」と詠み、桜が「ものあはれ」などと基調とする日本人の精神具体的な例えとみなした。

潔よさを人の模範と見て、江戸時代以降しばしば武士道のたとえにされてきた。

ただし、そのようにすぐに花が



散ってしまう様は、家が長続きしないという想像を抱かせたため、意外と桜を家紋とした武家は少ない。

明治時代に新渡戸稲造が著した『武士道』では「武士道（シヴァリー）」とは日本の象徴たる桜の花のようなもの」と冒頭に記している。

桜は春を象徴する花として日本人にはなじみが深く、春本番を告げる役割を果たす。桜の開花予報、開花速報はメディアを賑わすなど、話題・関心の対象としては他の植物を圧倒する。

入学式を演出する春の花として多くの学校に植えられている。

携帯電話サイトによる調査に過ぎないが、回答者の8割が桜を「とても好き」と答えた。九州から関東での平地では、桜が咲く時期は年度の変わり目に近く、桜の人気は様々な生活の変化の時期である事とも関係する。

桜は春の象徴、花の代名詞として和歌、俳句をはじめ文学全般において非常に良く使われており、現代でも多くの音楽、文化作品が生み出されている。

伝統文化的作品の例では桜を人に見立てた能の西行桜などがある。江戸時代の代表的俳人・松尾